

出 口 遺 跡

福岡県大野城市下大利所在遺跡調査報告

大野城市文化財調査報告書

第 28 集

1989

大野城市教育委員会

で ぐち 出 口 遺 跡

福岡県大野城市下大利所在遺跡調査報告

大野城市文化財調査報告書

第 28 集

1989

大野城市教育委員会

序

本市は福岡市に隣接していることもあり、出口遺跡の周辺もすでに宅地化が進み、わずかに丘陵を残すだけとなっています。牛頸、下大利、上大利地区は牛頸窯跡群をはじめとして古墳時代から平安時代の遺跡の多い所として有名ですが、今回の出口遺跡では弥生時代の遺構を確認しました。それらは土坑やピットでしたが貴重な資料となりました。また古墳時代・奈良時代の遺構、遺物も検出されましたが、特に奈良時代以降の遺構については近接する水城築造との関係を解明していかなければなりません。

最後に本調査に御協力いただいた新栄住宅株式会社には心から感謝いたします。

平成元年 3 月 31 日

大野城市教育委員会

教育長 久 野 英 彦

例 言

- 1 本書は大野城市教育委員会が新栄住宅からの受託事業として実施した出口遺跡の報告書である。
- 2 遺物実測、拓本、製図は秀嶋和子、竹林りさ、河鍋洋子、井手美智子、下村が担当した。
- 3 本書の執筆は、I を舟山、他を下村が担当した。
- 4 第1図に掲載した地図は国土地理院発行の地形図「福岡南部」「不入道」を使用した。

本文目次

I はじめに	1
II 位置と環境	1
III 調査の結果	3
1 調査の概要	3
2 竪穴式住居跡	3
3 土坑	9
4 その他の遺構と遺物	12
IV まとめ	16

図版目次

図版 1	(1)調査前（南側から） (2)表土剥ぎ状況
図版 2	(1)全景（南側から） (2)全景（北側から）
図版 3	(1)1号住居跡（南側から） (2)土坑－1
図版 4	(1)土坑－2 (2)土坑－3・4
図版 5	出土遺物(1)
図版 6	出土遺物(2)
図版 7	出土遺物(3)
図版 8	出土遺物(4)

挿 図 目 次

第1図 出口遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図	2
第2図 1号住居跡実測図	4
第3図 出口遺跡遺構配置図	折込
第4図 1号住居跡出土遺物実測図①	5
第5図 1号住居跡出土遺物実測図②	6
第6図 土坑－1・土坑－2実測図	7
第7図 土坑－1出土遺物実測図	8
第8図 土坑－2出土遺物実測図	9
第9図 土坑－3実測図	9
第10図 土坑－4実測図	10
第11図 土坑－4出土遺物実測図	11
第12図 西側斜面出土遺物実測図①	12
第13図 西側斜面出土遺物実測図②	13
第14図 ピット出土遺物実測図	14
第15図 出土石器実測図	15

I はじめに

本市下大利5丁目860-3番地は、周囲が宅地化された中でわずかに自然が残る独立丘陵の観を呈していた。新栄住宅はこの地を造成してマンション建設を計画し、文化財の有無について本市教育委員会に打診した。このため昭和63年9月21日に試掘調査を実施したところ、円形のピットと形不詳ながらも土師器・須恵器を多く含んだ落ち込みを検出した。このため文化財の取り扱いについて、当時の地権者も含めて協議したところ、開発計画は変更できないということで事前の発掘調査を実施することになった。調査は費用を新栄住宅が全額負担ということで昭和63年12月1日～平成元年1月31日まで、また、整理作業を1月中旬～2月末まで実施した。調査体制は以下の通りである。

大野城市教育委員会	教育長	久野英彦
同	教育部長	助村浩靖
同	社会教育課課長	岡部弥之助
同	〃 課長補佐	青木克正
同	〃 主査	高橋裕司
同	〃 技師	舟山良一
同	〃 技師	向直也
同	〃 技師	徳本洋一
同	囑託（調査担当）	下村精一
同	囑託	秀嶋和子

調査作業員 梅尾ハツエ、川口清己、河野房子、川辺照子、川辺美喜子、川辺満子、佐藤利恵子、篠原ウタ子、篠原純子、手塚キヨ子、中山さつき、中山チエ子、中山三千代、福岡麗子、藤島ミトシ、山下洋子

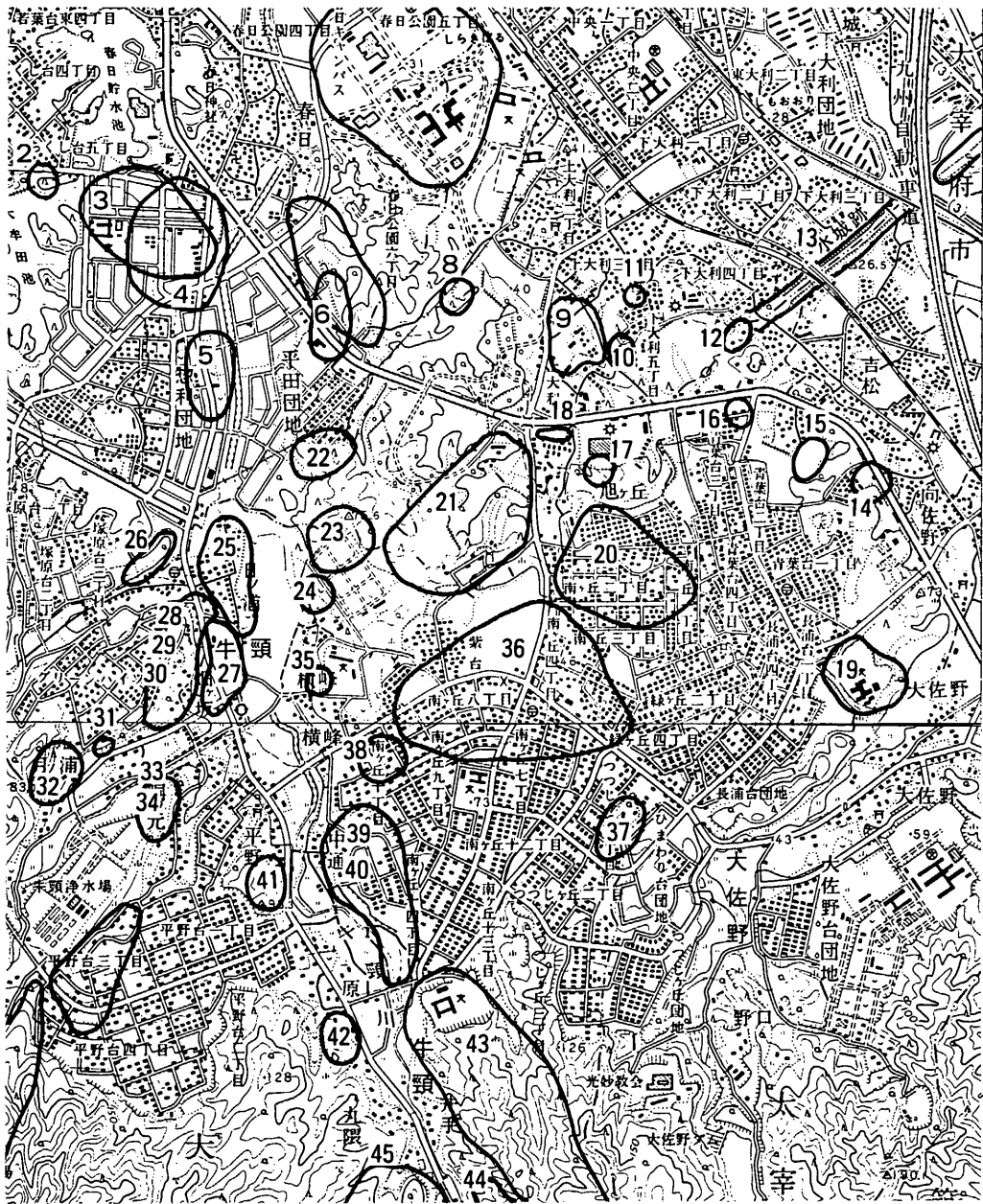
整理補助員 竹林りさ

整理作業員 井手美智子、河鍋洋子、町井裕子、松岡信子

最後に調査費用の負担を快諾された新栄住宅、協力頂いた旧地権者中寺ヨミ子、中寺忠、中寺雅一の各氏に厚く感謝の意を表したい。

II 位置と環境

出口遺跡は大野城市下大利5丁目に所在する遺跡である。この遺跡は1980年福岡県教育委員会発行の「福岡県遺跡等分布地図」に掲載されている谷川遺跡の最南端に位置するが、谷



第1図 出口遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図 (1/25000)

- | | | | | |
|----------------|-----------|------------|-----------|------------|
| 1 九州大学キャンパス内遺跡 | 10 出口遺跡 | 19 宮ノ本窯跡群 | 28 畑ヶ坂古墳 | 37 上平田窯跡群 |
| 2 大牟田池窯跡 | 11 出口窯跡 | 20 大浦窯跡群 | 29 畑ヶ坂窯跡群 | 38 東浦窯跡群 |
| 3 惣利窯跡群 | 12 吉松古墳 | 21 野添窯跡群 | 30 畑ヶ坂遺跡 | 39 中通窯跡群 |
| 4 惣利遺跡群 | 13 水城跡 | 22 春日平田遺跡群 | 31 月ノ浦古墳 | 40 中通古墳群 |
| 5 イケ谷古墳群 | 14 尊田窯跡 | 23 華無尾窯跡群 | 32 月ノ浦窯跡群 | 41 城ノ山窯跡 |
| 6 春日平田窯跡群 | 15 篠振窯跡 | 24 華無尾遺跡 | 33 胴ノ元窯跡群 | 42 原窯跡群 |
| 7 向谷遺跡群 | 16 神の前窯跡群 | 25 日ノ浦遺跡 | 34 胴ノ元古墳 | 53 ハセムシ窯跡群 |
| 8 梅頭窯跡 | 17 谷蟹窯跡 | 26 塚原古墳群 | 35 屏風田遺跡 | 44 道ノ下窯跡群 |
| 9 上園遺跡 | 18 上大利水城 | 27 塚原遺跡群 | 36 平田窯跡群 | 45 井手窯跡群 |

川遺跡の範囲が広く実態が不明のためこの調査地の小字名をとりこの部分を出口遺跡とする。
出口遺跡はすぐ西側に上園遺跡（大野城市文化財調査報告書18集・21集）を望むことができる。

出口遺跡は牛頸山から北に派生する小高い丘陵上に位置し平野部を望む。この丘陵のすぐ西側には平田川が流れており、上園遺跡の立地する平地とは地形的に隔絶されている。またすぐ東側には水域跡がある。遺構面は赤褐色の粘質土で、遺構は標高38～42m強の部分で検出された。

附近の遺跡からは、前述した上園遺跡から古墳時代後期の竪穴式住居、土坑、平安時代の掘立柱建物土坑を確認しており、また、南東には6世紀後半から6世紀末の須恵器窯跡神ノ前窯跡があり、牛頸窯跡群内に含まれる。出口遺跡は後述するように弥生時代から歴史時代に及ぶ土器の出土、遺構の確認をしているが、これまで附近では弥生時代の遺跡の確認はなされていない。また出土遺物の中には旧石器時代の剥片石器もあるが、やはり近辺の当該時期の遺跡の確認はなされていない。

III 調査の結果

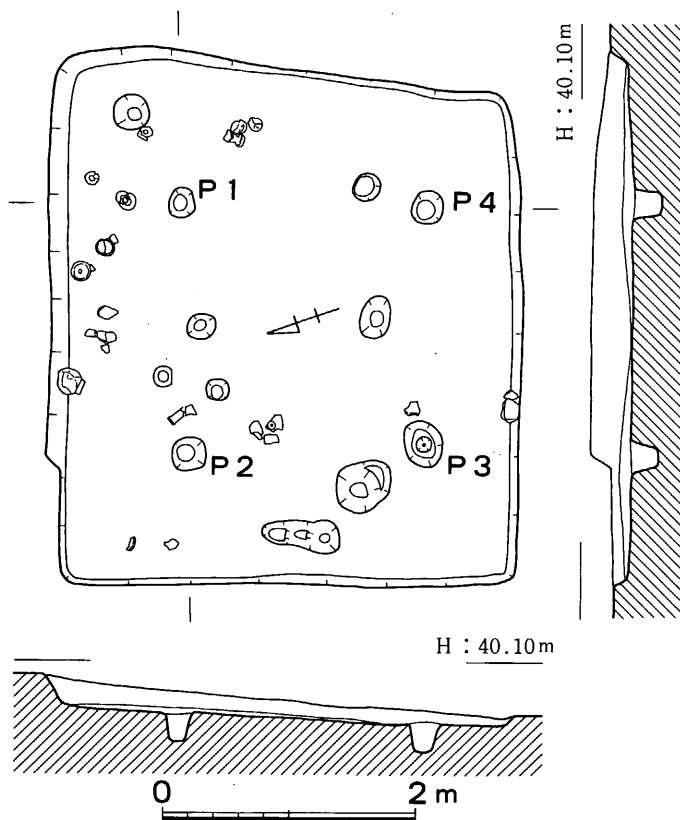
1 調査の概要

調査地点は南北方向に長い独立丘陵の観を呈する。北側は既に削平されて、南半分が残る。北が高く南が低い。標高は38～42mである。遺構は全域で検出されたが、尾根中心線より東側の斜面に多い。検出遺構は竪穴式住居1、土坑4、溝状遺構1、不整形の遺構1、そしてピットである。時代的には弥生時代中期～奈良時代のものである。遺構配置図（第3図）の1号住居跡周辺あるいは北西側に1辺約1mの方形または楕円形の落ち込みがいくつかあるが、埋土の状況から遺構としていいか疑わしいのでとり上げなかった。また、調査地南端近くの西側斜面には故意に投棄したものかどうかは不明であるが、比較的多量の土器が出土した。他には遺構検出に当たり地下げを行った際に旧石器時代に属する剥片尖頭器が出土している。

2 竪穴式住居跡

1号住居跡（第2図）

調査区中央よりやや南側で検出したもので、西側の一部を試掘トレンチで約1m幅で削平される。長方形をなし、大きさ4.2m×3.7mほどのものである。壁の高さは、5cm×20cmと低い。床面では多くのピットを検出するが、支柱穴と思われるものは、P1～P4で深さは約20cmである。またP1～P2、P2～P3間は約2mである。カマドは確認できず、焼土痕も見あたらなかった。地形的にも北側より南側が低く、壁の残りのよい北側に遺物も集中する。また検



第2図 1号住居跡実測図 (1/60)

出面及び埋土上部では土師器が多く出土し、床面近くでは須恵器が多く出土した。出土した土器は時代差も大きい、住居跡の時期は、床面近くに位置する6世紀後半の須恵器の時期と考えられる。他の土器は後の時代に投げ込まれたか、地形的に高位所から流れこんできたものと考えたい。

出土遺物 (第4・5図)

この住居跡からの出土遺物は床面より出土したものと浮いた状態のものに分れるため、床面からの出土遺物を先に、浮いた状態のものを上層出土遺物として後に記した。

床面出土遺物

土師器

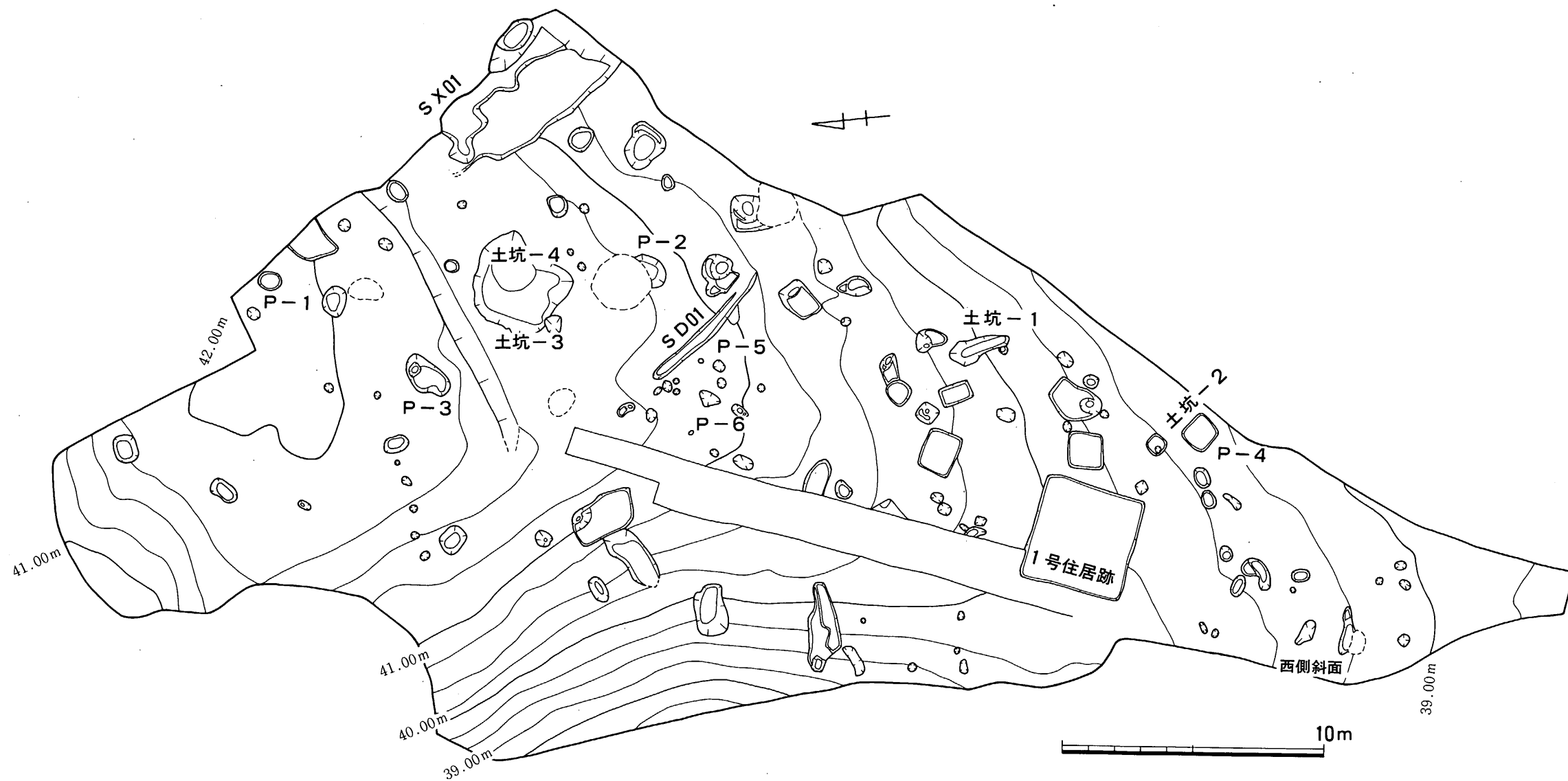
高杯 (1・2・8) 1・

2が短脚で1は杯部外面にへら削りを施す。他はヨコナデである。厚みをもち内外面とも淡橙色である。2は脚上部外面はヨコナデ、杯部下端外面はカキ目を施す。杯上部は摩滅のため調整不明である。厚みをもち、内外面淡茶灰色である。8は脚部だけを残す。調整はすべてヨコナデを施す。

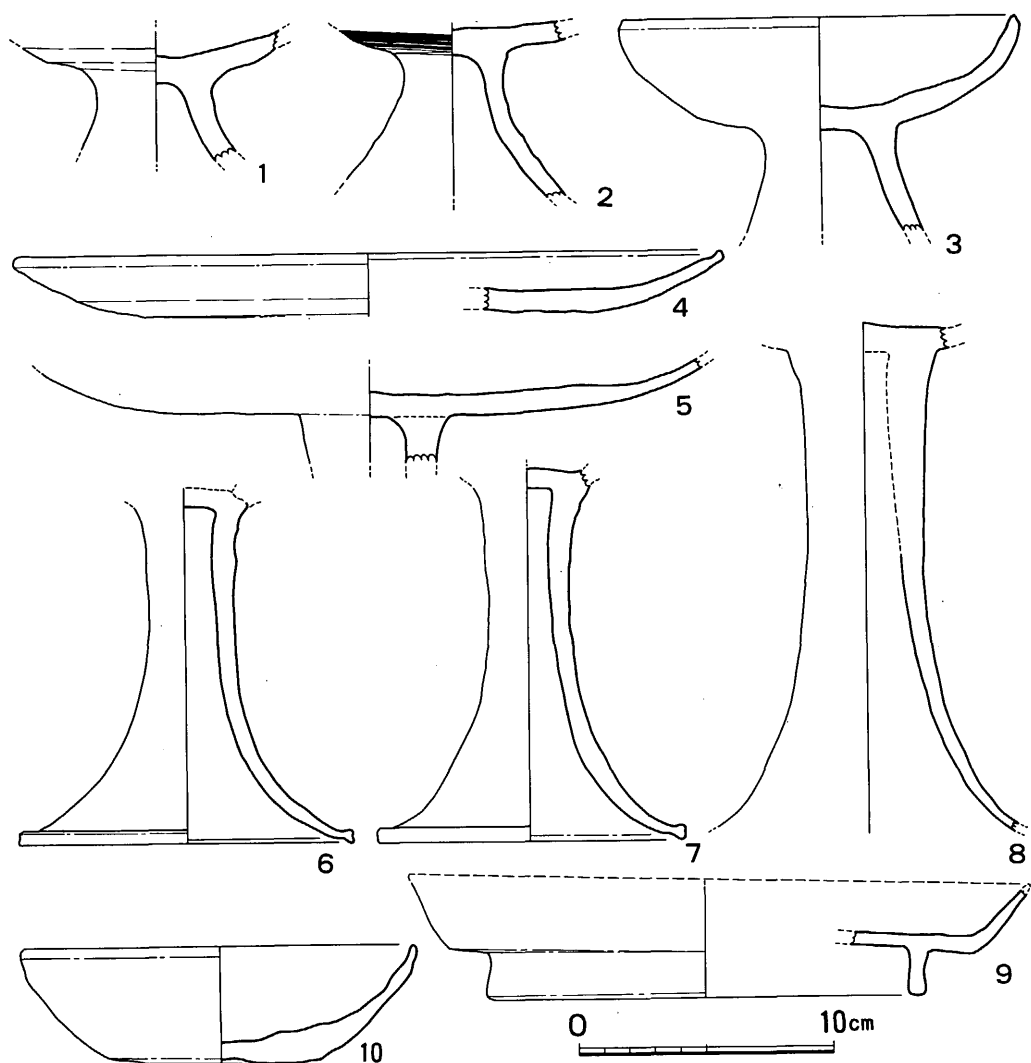
鉢 (10) 一部を欠くが、復元口径15.6cmを測る。内外面とも摩滅のため調整不明であるが、底部は厚みもち座りがよい。内外面明褐色である。

須恵器

杯蓋 (11・12) 11はほぼ完形で、口径13.6cm、器高4.0cmを測る。天井部より体部にかけはへら削り、他はヨコナデ、ナデを施す。へら削りは明瞭であるが一部灰をかぶっている。内面淡青灰色、外面灰色である。12は3分の1の破片で、復元口径12.8cmを測る。天井部へら削り、他はヨコナデ、ナデを施す。天井部は内面平坦で、外面中心部はやや窪んでいる。内外面灰色である。

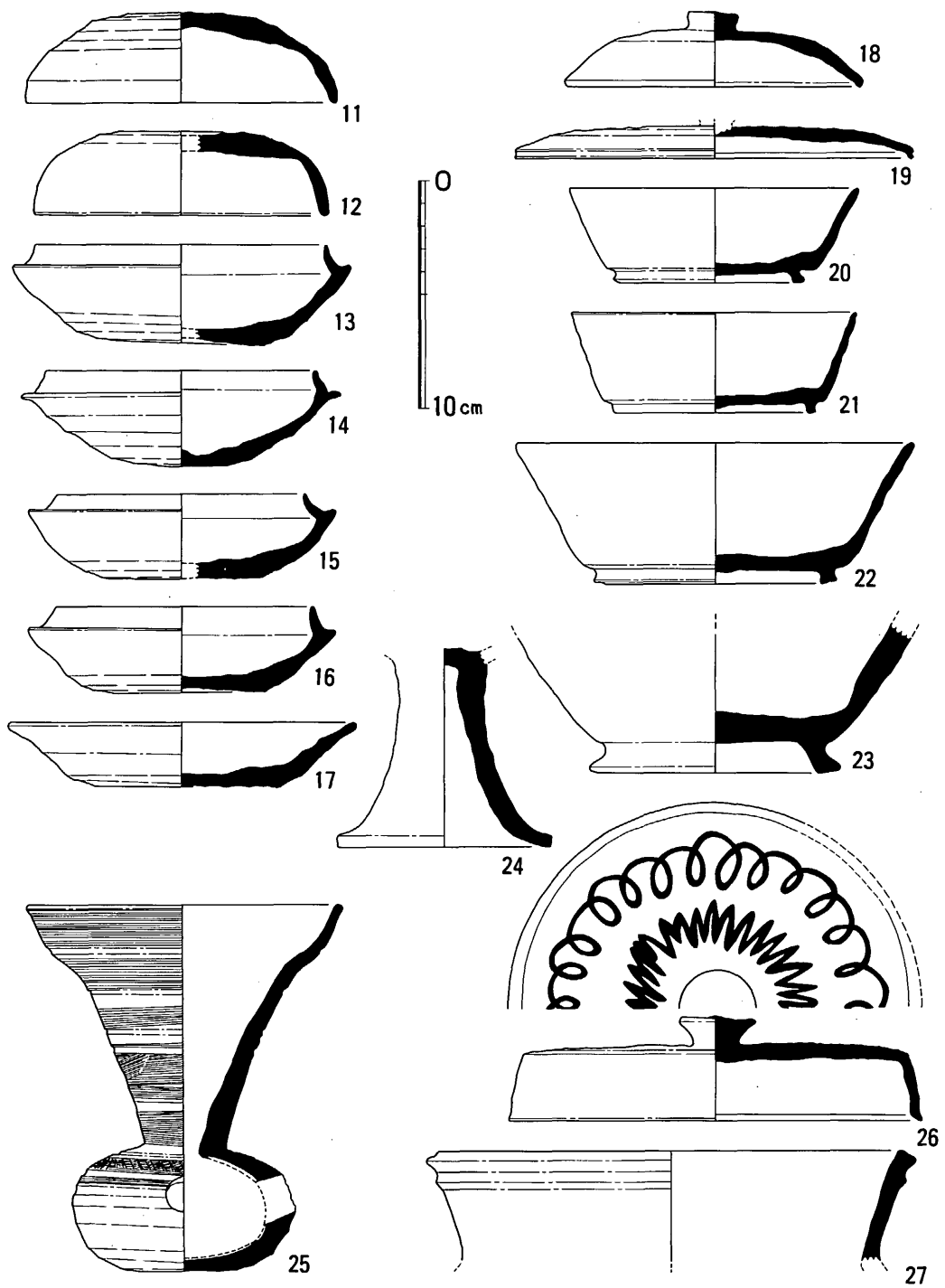


第3図 出口遺跡遺構配置図 (1/200)



第4図 1号住居跡出土遺物実測図① (1/3)

杯身 (13~16) 13は2分の1の破片で、復元口径12.6cmを測る。底部から体部にかけてへラ削り、他はヨコナデ、ナデを施す。外面は小刻みにへラ削りを施す。内外面灰色である。14は口縁部を一部欠く。口径11.7cm、受部径13.95cm、器高4.2cmを測る。底部外面はへラ削り、外面はヨコナデを施すが丁寧さを欠く。他はヨコナデを施すが、全体的に灰をかぶっている。15は3分の1の破片で、復元口径10.5cmを測る。底部より体部にかけてへラ削り、他はヨコナデ、ナデを施す。底部は平坦である。16は一部欠くがほぼ関係で、口径11.2cm、最大径13.4cm、器高3.7cmを測る。底部から体部にかけてへラ削り、他はヨコナデ、ナデを施す。へラ削りは、はっきりしており、底部外面はわずかに窪む。



第5图 1号住居跡出土遺物実測図② (1/3)

杯 (17) 17は平坦な底部と斜め上方にのびる体部をもつもので、ほぼ完形である。口径15.2cm、器高2.8cmを測る。底部へラ削り、他はヨコナデ、ナデを施す。底部は平坦で体部との境には小幅のへラ削りを施す。内面灰茶褐色、外面淡灰色である。杯蓋の体部下半を外反させたかのような形を呈するもので、蓋とした方がよいかもしれない。

甗 (25) 復元口径13.8cm、器高16.05cm、胴部最大径9.8cmを測る。口縁部半分を欠損するが底部は平坦で、胴部は扁球形である。底部より胴部中位までをへラ削り、他はヨコナデを施す。口縁部は丸味をおびる。口頸部にはカキ目を施し、胴部上位には刻目を施している。

上層出土遺物

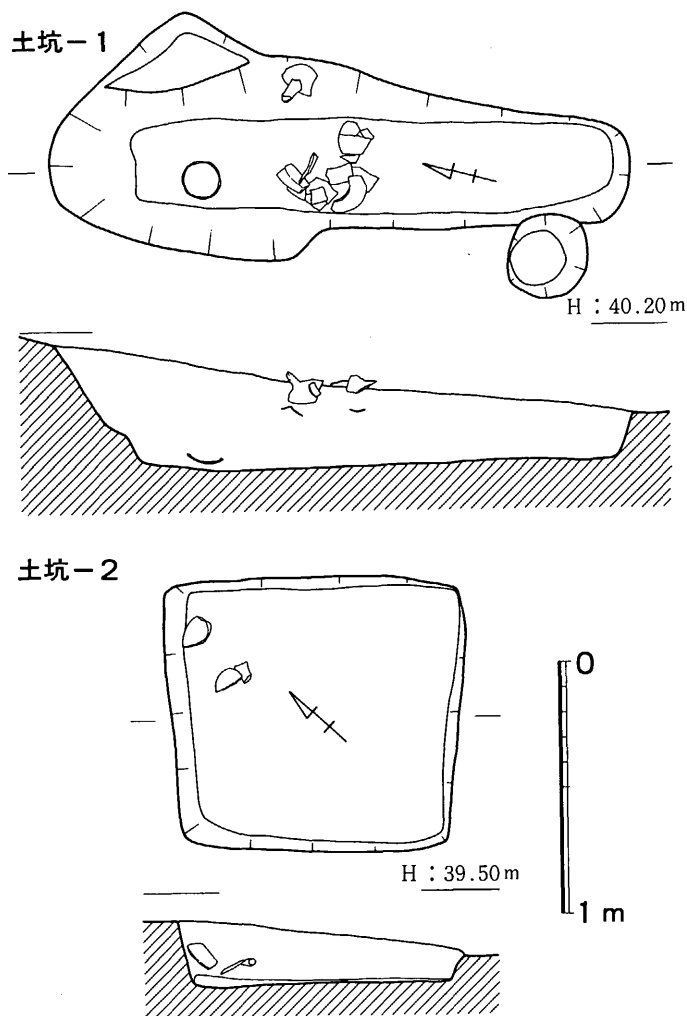
土師器

高坏 (3～7) 3は短脚で、復元口径15.4cmを測る。全体に摩滅がひどく調整不明、内外面明褐色である。4・5は杯部を残し、復元口径28.0cmを測る。5は口縁部を欠損する。4・5とも摩滅がひどいが一部にへラ磨きを施す。内外面とも明褐色である。6・7は、脚部のみ残す。脚端径は6-13.2cm・7-12.25cmを測る。6・7はすべてヨコナデを施す。6・7とも赤褐色である。

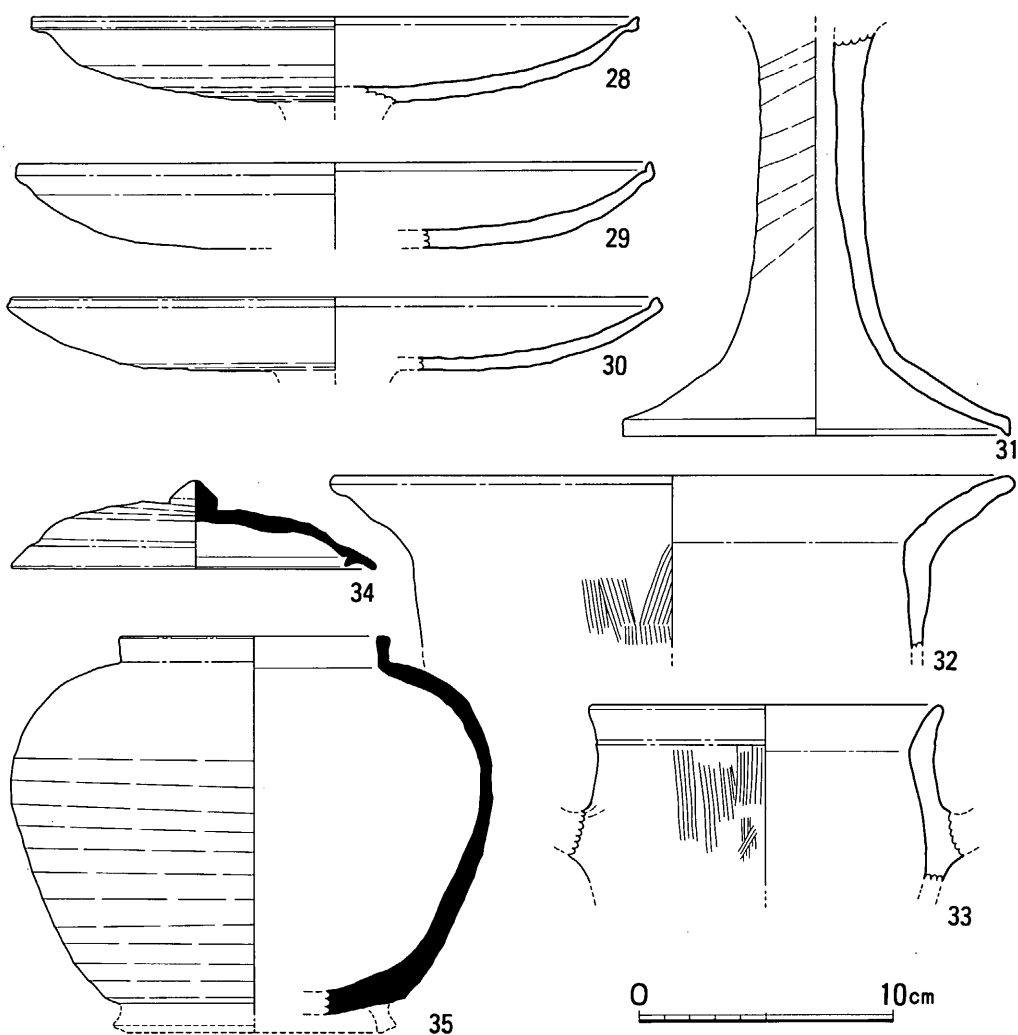
盤 (9) 復元口径24.6cm、高台径17.3cm、高台高1.8cmを測る。内外面ともへラ磨きを施す。高台は垂直でしっかりしている。内外面とも赤褐色である。

須恵器

杯蓋 (18・19) 18は復元口径12.8cm、最大径13.0cm、つまみ径2.2cm、器高3.3cmを測る。体



第6図 土坑-1・土坑-2実測図 (1/30)

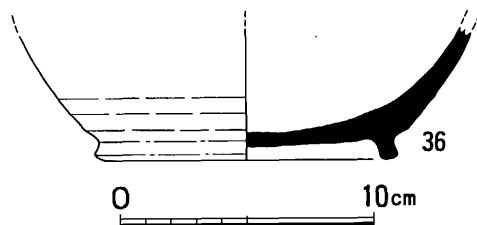


第7図 土坑－1出土遺物実測図 (1/3)

部より外面上半はヘラ削り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。宝珠様のつまみがつき、つまみの位置は中心よりずれている。口縁部は丸く終る。19はつまみを欠損する。復元口径17.4cmを測る。天井部外面はヘラ削りで、他はヨコナデ、ナデを施す。口縁部は直立気味で端部はやや外反する。

杯身 (20～22) 20は復元口径12.6cm、高台径8.25cm、器高4.15cmを測る。底部外面はヘラ削り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。体部は直線的に斜め上方にのび、高台は底部端よりやや内側につく。内外面青灰色で3分の2の破片である。21は復元口径12.4cmを測る。底部はヘラ削り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。体部は斜め上方に直線的にのびる。高台は底部の

端よりやや内側につき、直立する。内外面とも淡灰色で3分の1の破片である。22は復元口径17.4cm、高台径10.6cm、器高6.2cmを測る。底部外面はへら切り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。口縁部はやや外反し、端部は丸い。高台は底部端よりやや内側につく。20・21より大型で、内外面淡青灰色で3分の1の破片である。



第8図 土坑-2 出土遺物実測図 (1/3)

長頸壺 (23) 底部3分の2ほどの破片で、高台径10.9cmを測る。底部外面、胴部はへら削り後ナデ、他はヨコナデを施す。高台は「ハ」の字状に開く。

高杯 (24) 脚部のみの破片である。内外面ヨコナデを施す。脚端部はなだらかに広がり、淡黄灰色である。

蓋 (26) 復元口径18.0cm、つまみ径3.35cm、器高4.6cmを測る。天井部内面は不定方向のナデ、天井部外面はヨコナデを施す。肩部はほぼ直角に折れ曲り、端部はやや外反する。天井部外面には、内側に鋸歯状、外側に螺旋状の暗文を施す。

甕 (27) 口縁部の小片である。復元口径21.3cmを測る。内外面ともヨコナデで口縁部外面に2条の凸帯が巡る。

3 土坑

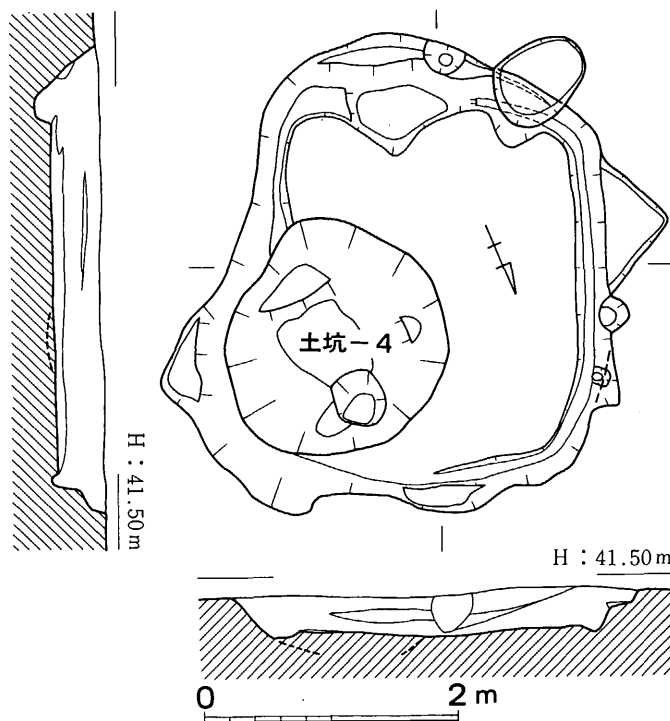
土坑-1 (第6図)

1号住居跡から5m東で検出した。ゆるやかな傾斜面に位置し、長方形のもので長さ約2.9m、最大幅約80cm、深さは南側で20cm、北側で50cmほどである。床面は平坦で須恵器の杯蓋が1点出土しているものの、あとの遺物は床面より30cmほど浮いた状態で出土した。

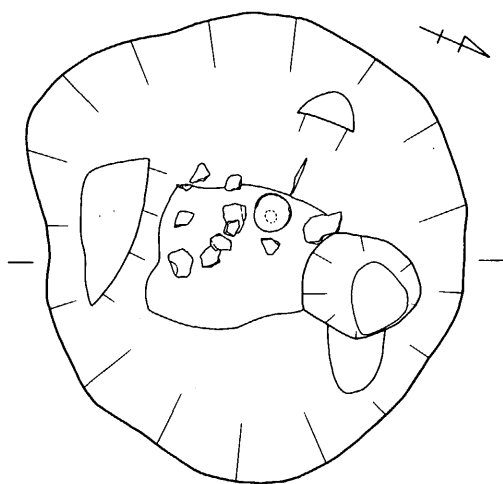
出土遺物 (第7図)

土師器

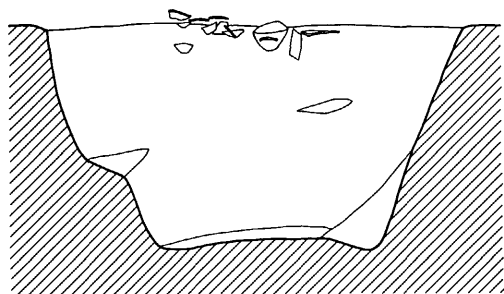
高杯 (28~31) 28~30は杯部の一部を残すものであ



第9図 土坑-3 実測図 (1/60)



H : 41.10m



第10図 土坑-4実測図 (1/30)

短頸壺 (35) 口径10.7cm、胴部最大径14.9cm、器高14.95cmを測る。高台は欠損しているが、高台の痕を残す。肩部より底部にかけてへら削り、他はヨコナデ、ナデを施す。口縁部は直立し、1.0cmを測る。内面淡青灰色、外面灰色である。

土坑-2 (第6図)

1号住居跡の3m南側で検出した。1.1m×1.15mのほぼ正方形で、深さ15cm~25cmである。床面はほぼ平坦で、赤く焼けた部分がある。遺物は北側隅で床面より5cmほど浮いた状態で出土した。

出土遺物 (第8図)

須恵器

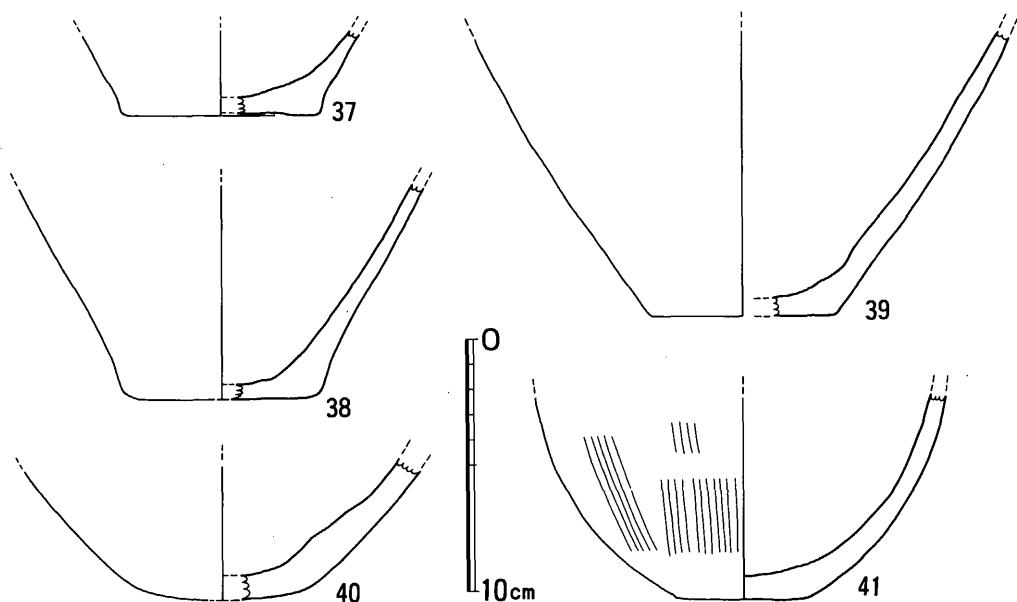
長頸壺 (36) 復元高台径11.9cmを測る。胴部外面はへら削り、底部はへら切り後ナデ、内面

る。復元口径は28-24.0cm、29-25.2cm、30-25.4cmを測る。28~30とも外面は磨き、内面は29が摩滅して不明であるが、28・30はナデである。31は脚部のみを残し、脚端径15.2cmを測る。外面ヨコナデ、内面は摩滅しているので判りにくい、ヨコナデであろう。また内外面ともに絞り痕を残す。

甕 (32・33) 32は口縁部3分の1の破片である。復元口径27.0cmを測る。口縁上部は内外面ともヨコナデ、胴部外面は縦のハケ目を施す。内外面とも淡黄褐色で、外面一部にススが付いている。33は把手付の甕の小片である。復元口径14.0cmを測る。把手部は欠損しているが、取り付け部附近には指で押えた痕が見られ、その部分から口縁部にかけてハケ目を残し、口縁部外面はヨコナデである。

須恵器

杯蓋 (34) 全体的にひずみを生じている。口径12.0cm、最大径14.4cm、器高3.5cm、つまみ径1.9cmを測る。天井部外面へら削り、他はヨコナデ、ナデで、天井部外面にへら記号をもつ。



第11図 土坑－4 出土遺物実測図 (1/3)

はヨコナデを施す。

土坑－3 (第9図)

調査区中央より北側で検出し、土坑－4を切る。隅丸方形を呈し、規模は3.5m×2.7m、深さ40cmで掘り方の内廻りには小さいながらも溝が巡る。中心より北側では、床面よりやや上で炭化物を確認した。埋土からは弥生式土器が出土したが、残りが悪く、実測するにはいたらなかった。

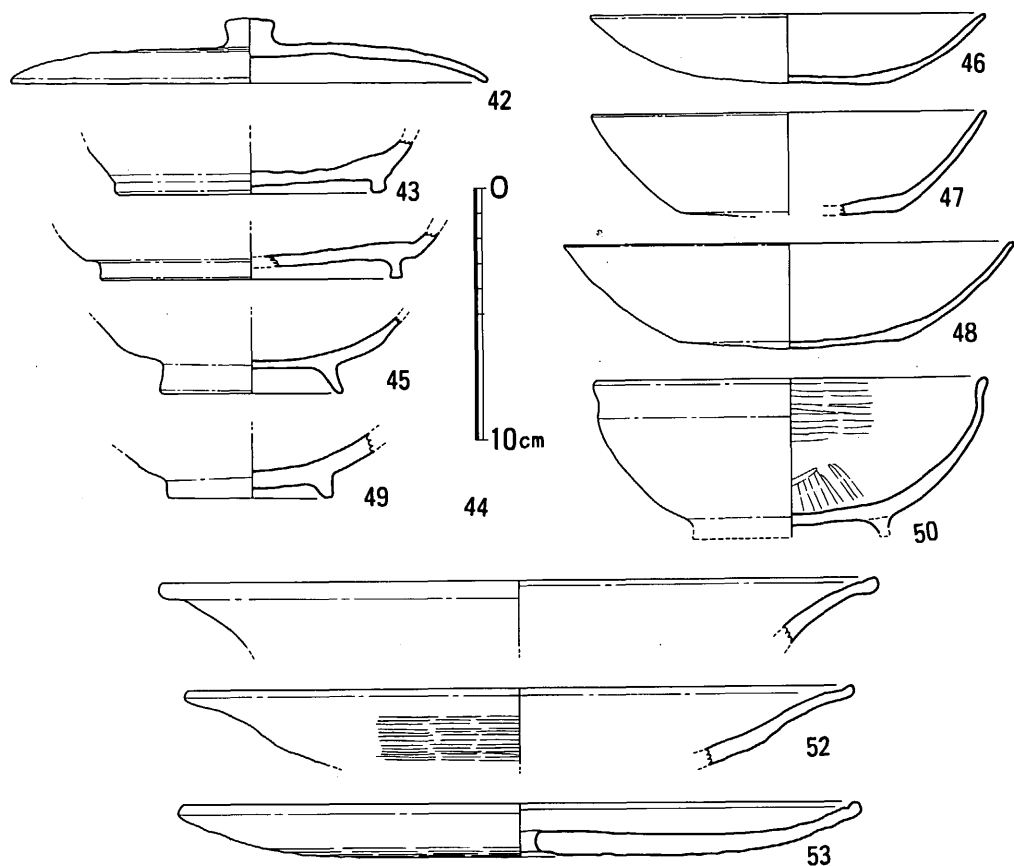
土坑－4 (第10図)

土坑－3に切られる。土坑－3の検出時には確認できず、土坑－3を床面まで下げた状態で確認できた。円形を呈し直径約1.8m、深さ90cmである。弥生式土器が出土する。

出土遺物 (第11図)

弥生式土器

甕(37～41)すべて底部の一部を残すものである。復元底径は、それぞれ37－7.8cm、38－7.6cm、39－7.4cm、40－6.7cm、41－5.2cmを測る。すべて、焼成はやや不良で、37は黄褐色、38～41は明褐色をなす。37・38・39・41は平底であるが、40は丸底と思われる。調整は摩滅がひどく、39・40は内面にナデの痕をわずかに残しており、41は内面はナデ、外面は、縦方向のハケ目を残す。



第12図 西側斜面出土遺物実測図① (1/3)

4 その他の遺構と遺物

SD01

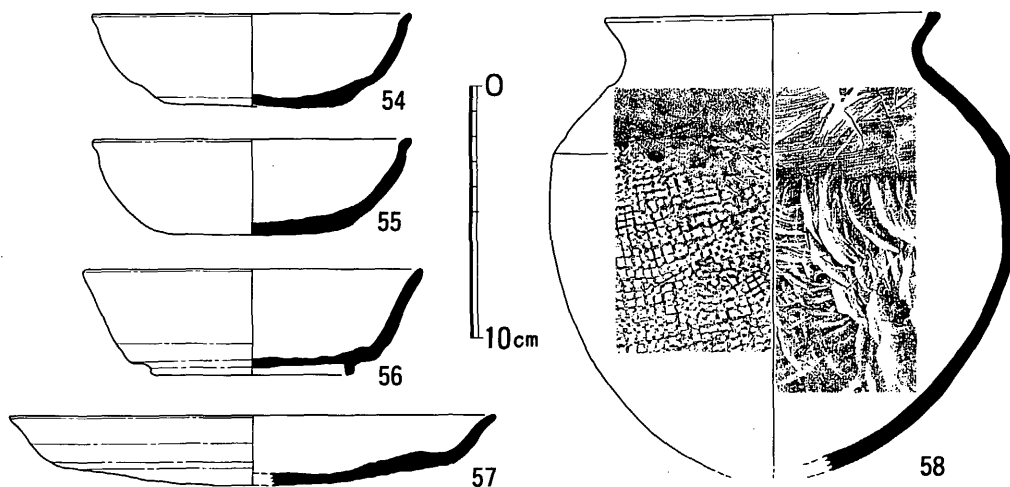
調査区ほぼ中央部で検出した。西から東に約5m延びて消滅する。幅は約0.5m、深さは西端部で0.1mである。遺物はない。

SX01

調査区東端部で検出した。東半分は開発で既に消滅している。長方形に近い不整形を呈し、残存長で約7m×4mを測る。西側壁高は約10cmであるが、東側に行くにつれて段をなして下がる。そして東端部に約1.5m×0.6m、深さ0.5mの楕円形をした土坑がある。出土遺物は小片のため図示できないが、須恵器、土師器が出土した。

西側斜面

調査区南端部の西斜面は急斜面をなしているが、この部分で多くの土器が出土した。上部からの流れ込みか、故意に投棄したものであるかは判断できなかった。



第13図 西側斜面出土遺物実測図② (1/3)

出土遺物 (第12・13図)

土師器

杯蓋 (42) 復元口径18.8cm、つまみ径2.0cmを測る。天井部外面はヨコナデを施す。他は摩滅して不明である。口縁部は丸味をおびる。

杯身 (43・44) 43は底部約4分の1の破片で、復元高台径10.8cmを測る。体部内外面はヨコナデ、底部外面はナデ、他は摩滅して不明である。高台の貼り付け部分が明瞭である。44は底部の3分の1の破片で、復元高台径12.0cmを測る。磨きを施している。高台は底部端よりやや内側に付けられる。色調は内外面とも明褐色である。

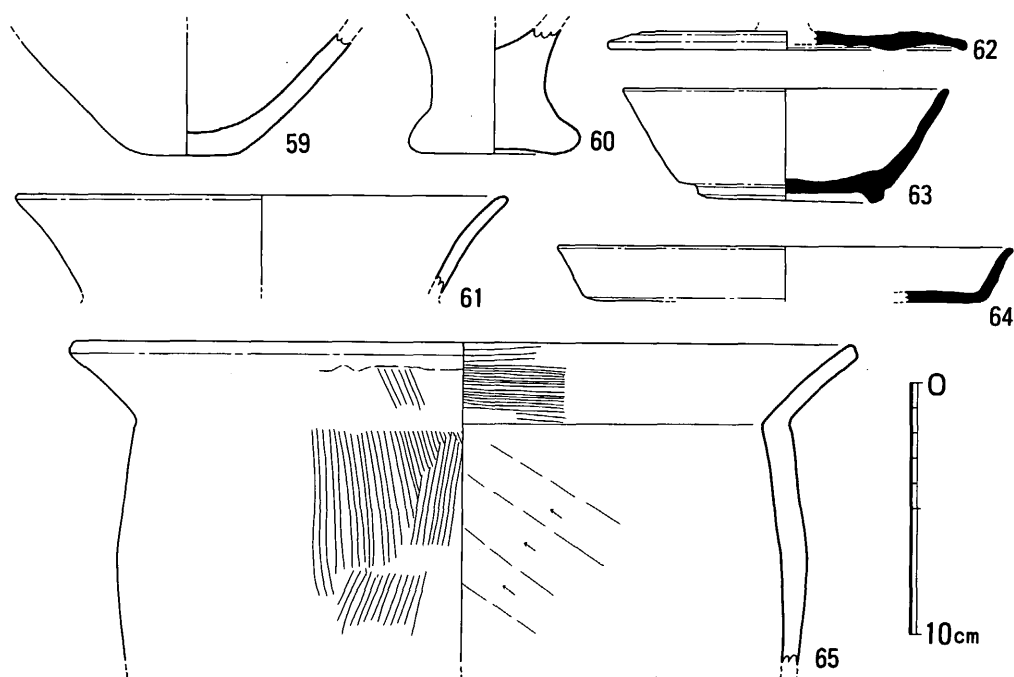
椀 (45) 高台径7.3cmを測る。調整は摩滅のため不明である。高台は「ハ」の字に付けられ、端部は丸味をおびる。色調は内外面とも黄褐色である。

杯 (46~48) すべて底部を平坦にするが、46は底部と体部の境が丸味をおびる。復元口径は46-15.6cm、47-15.6cm、48-17.9cmを測る。摩滅しているため調整がわかりにくい。体部外面は全てへら磨きの痕があり、内外面とも明褐色である。

高杯 (51~53) 51~53は杯部のみを残す。復元口径は51-28.4cm、52-26.4cm、53-27.0cmを測る。内外面へら磨きを施すが、53の杯部内面中心部はヨコナデである。51・53は杯体部内面の口縁下に沈線状の窪みが巡る。51は杯中央部に穿孔がある。また蓋の様な感じもうかがえる。51~53は内外面とも明褐色である。

黒色土器

椀 (49・50) 49は底部のみを残す。高台径6.6cmを測る。外面は摩滅しているので調整不明、内面はへら磨きを施す。色調は内面黒色、外面淡黄灰色である。50は復元口径15.6cmを測る。



第14図 ピット出土遺物実測図 (1/3)

底部外面はナデ、内面はへら磨き、他はヨコナデを施す。高台は欠損して完全ではないが、貼り付けである。口縁部は屈曲してやや外反気味に終り、端部は丸味をおびる。

須恵器

杯 (54・55) 復元口径は54・55とも12.6cmを測る。ともに底部外面はへら切り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。口縁部は外反し、端部は丸味をおびる。底部は54がやや窪み、55は平坦である。ともに淡黄灰色である。

杯身 (56) 復元口径13.1cmを測る。底部外面はへら切り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。口縁部はやや外反する。

皿 (57) 2分の1の破片で、復元口径19.1cmを測る。底部外面はへら切り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。底部はやや丸味をもち、口縁部は外反する。

甕 (58) 口縁から底部にかけて一部欠損する。復元口径13.2cmを測る。胴部内面から口縁部にかけてヨコナデ、胴部内面から底部にかけて青海波叩き、胴部外面は底部にかけて格子目叩き、他は灰をかぶっており調整不明である。底部は丸底で、口縁部は外反する。内面暗褐色、外面褐色で一部黄灰色、黒色である。

ピット出土遺物 (第14図)

ピットから土器がいくつか出土しているが、弥生式土器は主に調査区北西部に多い。第14図

59はP-1、60はP-2、61はP-3より出土したものである。その他須恵器、土師器は遺跡全体に分布している。第14図62はP-4、63はP-5、64・65はP-6より出土したものである。

弥生式土器

甕 (59・60) 59は復元底径4.2cmを測る。内

外面とも摩滅しているが、内面一部ナデの痕跡を残す。60は復元底径6.8cmを測る。内外面ナデで、一部指圧痕を残す。59は明褐色、60は淡黄褐色を呈す。

口縁部 (61) 小破片で器種不明。復元口径19.4cmを測る。内外面とも摩滅がひどく調整不明。内外面とも淡黄褐色である。

土師器

甕 (65) 復元口径31.2cmを測る。口縁内部は横方向のハケ目、外面はハケ目を施した後ヨコナデ、胴部内面はへら削り、外面縦方向のハケ目を施す。内外面とも明褐色で口縁部から胴部にかけて約5分の1の破片である。

須恵器

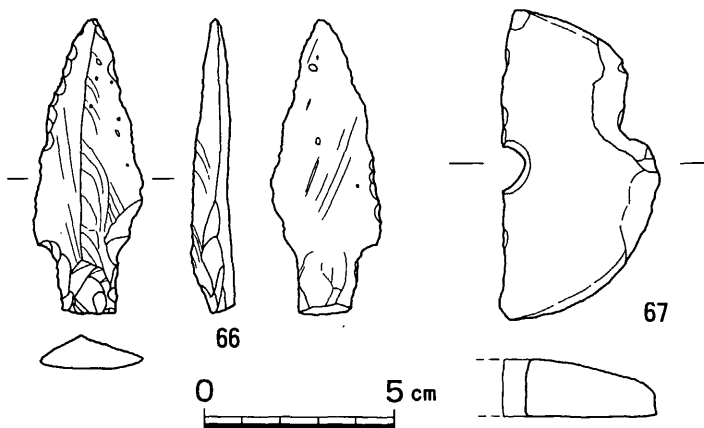
杯蓋 (62) 復元口径14.2cmを測る。天井部外面はへら切り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。つまみは残っていないが、残存部から見てつまみのあるものであろう。

杯身 (63) 口径12.9cm、器高4.5cm、高台径7.35cmを測る。底部外面はへら切り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。

皿 (64) 復元口径18.0cmを測る。口縁部から底部の小片である。底部外面はへら切り後ナデ、他はヨコナデ、ナデを施す。口縁部はやや外反する。内外面淡灰色である。

出土石器

調査区中央部北側では少量ではあるが石材片が出土している。その中で石器と確認できるものは次の2点である。2点とも調査区東端部のSX01の検出に際し、東側の段落ちより出土した。1点は旧石器時代のもので剥片尖頭器、もう1点は紡錘車であるが時期不明である。



第15図 出土石器実測図 (1/2)

剥片尖頭器(66) 刃部は断面三角形を呈し、長さ7.8cm、重さ15.7g、最大刃部幅2.85cmを計る。サヌカイト製で縦長剥片を利用し、そのするどい縁辺を刃部としている。剥片の打面側に基部調整が施され中央に稜線が走る。

紡錘車(67) 2分の1の破片である。重さ7.25g、中央の孔径は片面が1.1cm、もう一方の面が1.5cmを測る。石材は滑石で、片面はやや平坦でもう一面はふくらみをもつ。

IV まとめ

1 弥生時代の遺構

(1)土坑

土坑-3と土坑-4を検出した。土坑-3は土坑-4を切る。土坑-3は弥生式土器が出土したが小破片のため時期は決められなかった。土坑-4は弥生式土器の甕の底部がいくつか出土したが、これらからだけでは時期を決定しがたい。

(2)ピット

P-2出土遺物は弥生時代中期初頭のものと考えられる。他は時期を決定しがたい。

2 古墳時代～奈良時代の遺構

(1)竪穴式住居跡

1号住居跡。出土遺物は6世紀後半から奈良時代の土器であるが、奈良時代の須恵器、土師器は上層より出土したもので、下層、床面より出土した6世紀後半の須恵器からこの住居跡の時代は6世紀後半と考えられる。

(2)土坑

土坑-1と土坑-2の2基である。土坑-1は7世紀後半の土器も含むがその他は奈良時代に属するもので奈良時代の遺構と考えられる。土坑-2も同時期と考えられる。

(3)西側斜面出土遺物

意図的か流れ込みかわからないが、多くの須恵器、土師器、黒色土器が出土した。これらの土器は奈良時代のものである。

今回の調査では弥生時代から奈良時代の遺構を確認した。弥生時代の遺構、遺物は調査区北側、土坑-3・4の附近に分布しており、南側ではほとんど見あたらない。古墳時代～奈良時代の遺物は遺跡全面に広がるが、遺構としては古墳時代の住居跡1基と奈良時代の土坑、溝を検出したにすぎず、すでに削平されている丘陵の北側にも遺跡の広がりを考えることができる。

なお、遺物に関しては、太宰府市教育委員会山本信夫氏に多くのご教示をいただき感謝申しあげる。

版 图



(1) 調査前（南側から）



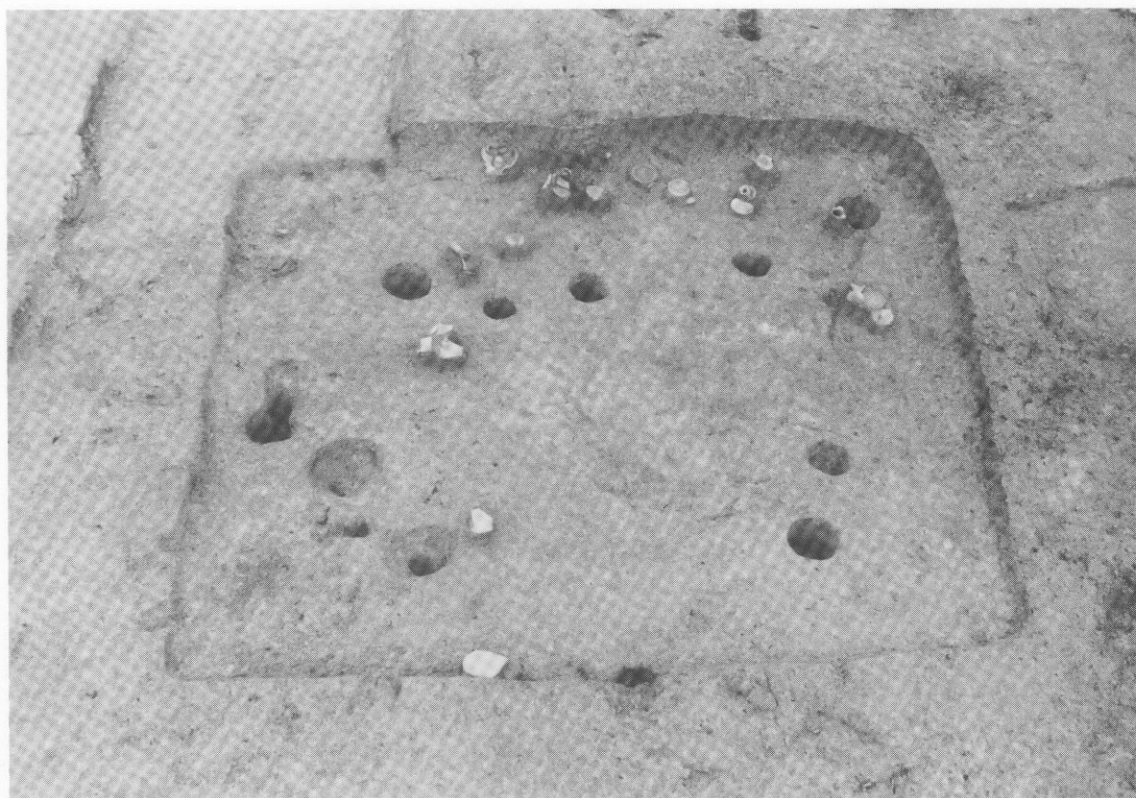
(2) 表土剥ぎ状況



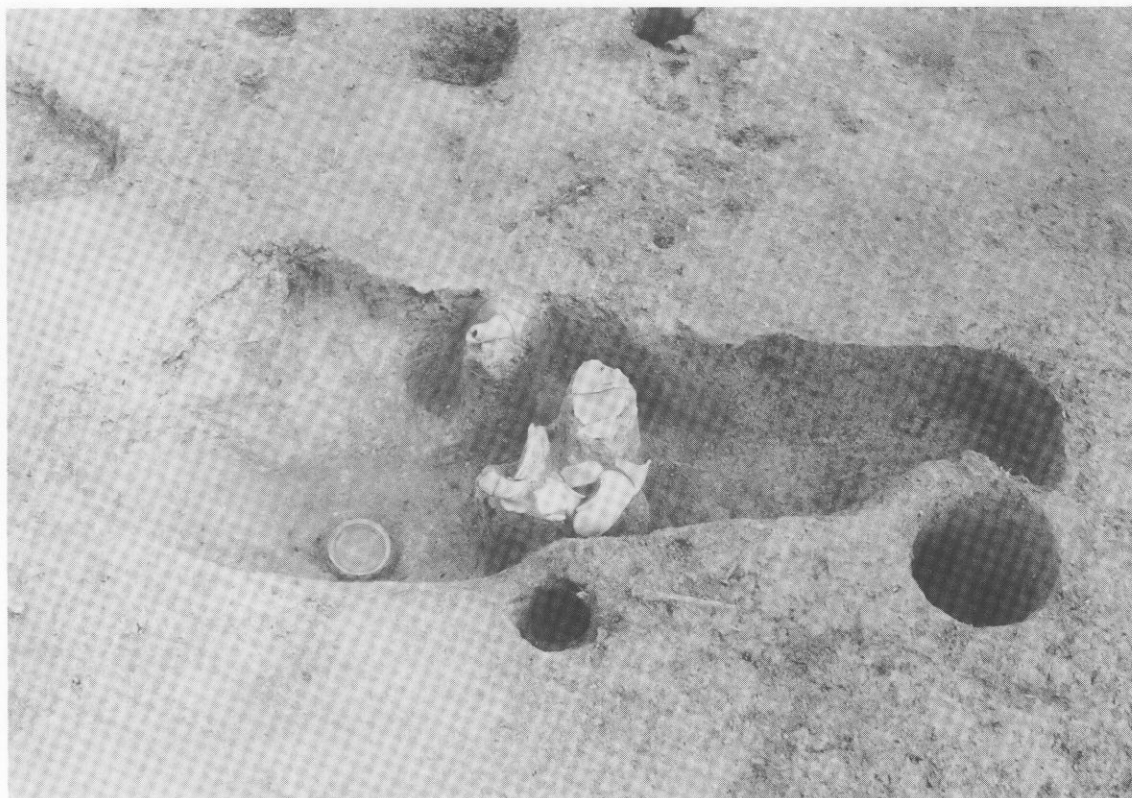
(1) 全景（南側から）



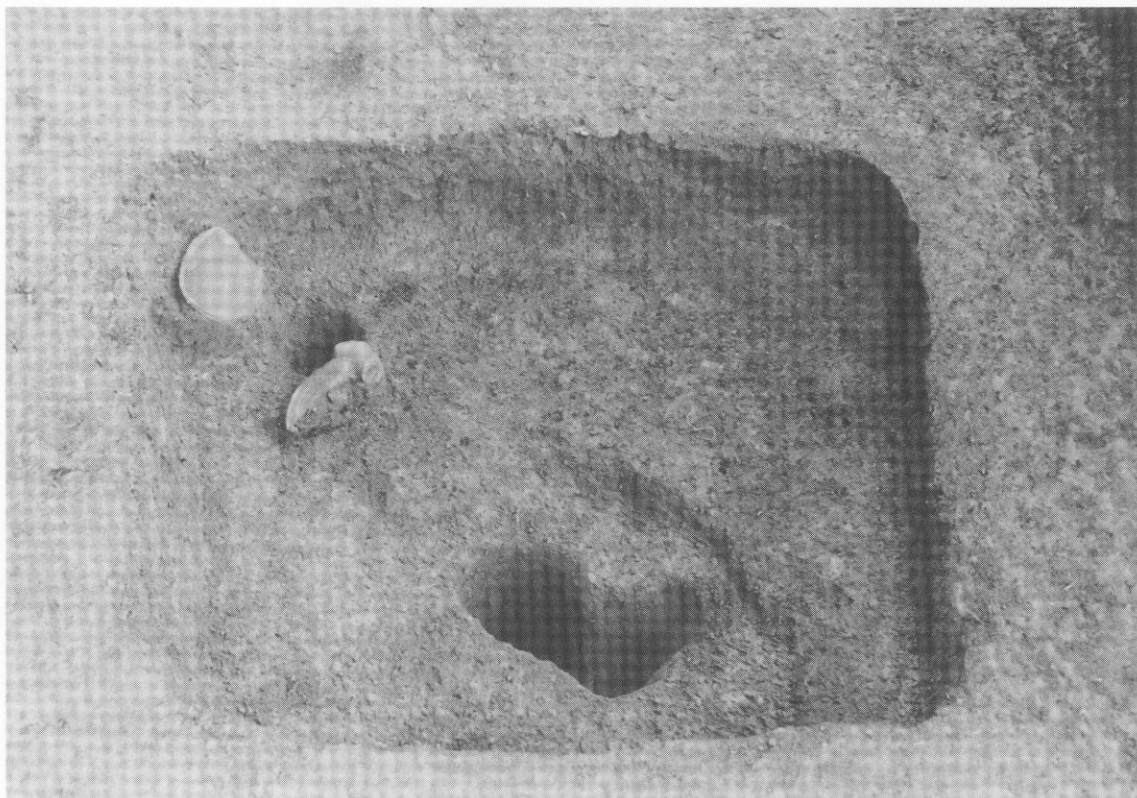
(2) 全景（北側から）



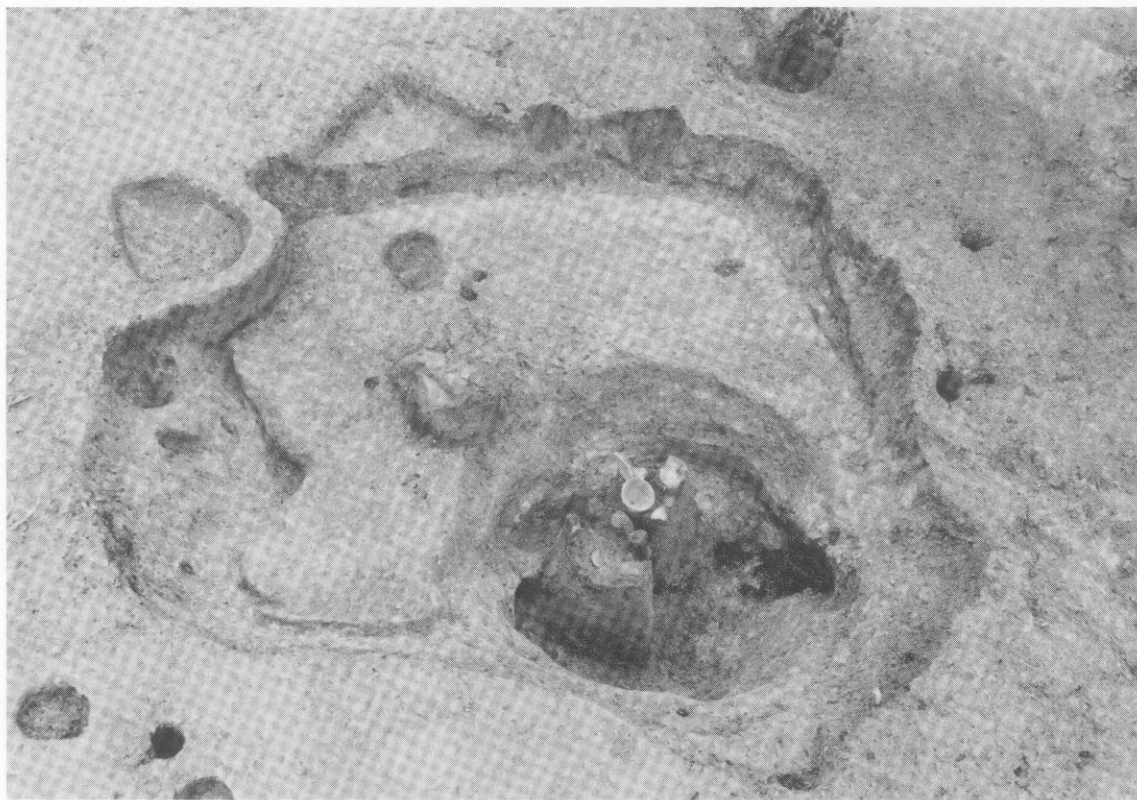
(1) 1号住居跡（南側から）



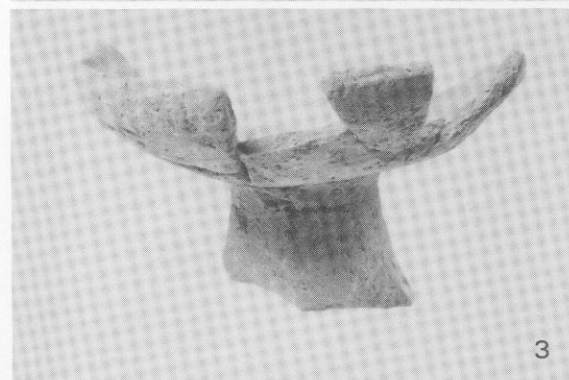
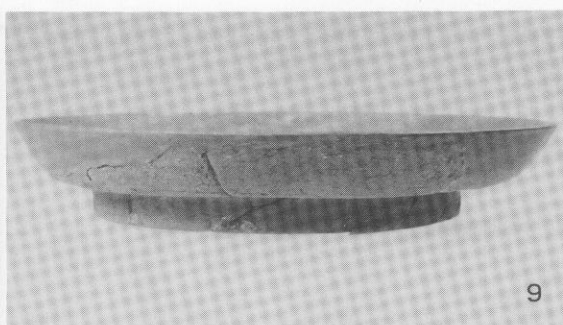
(2) 土坑-1

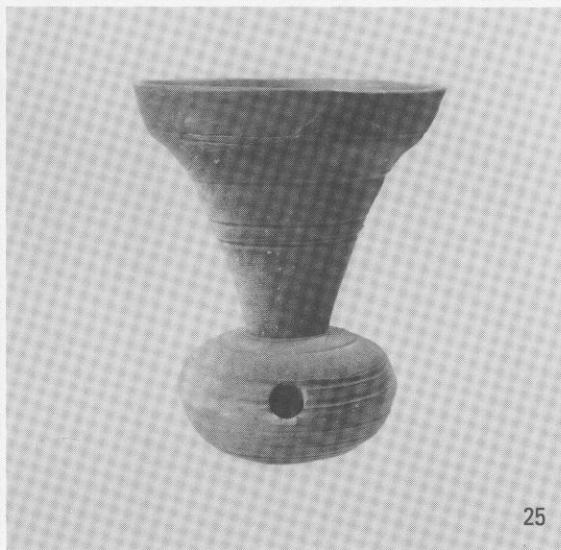
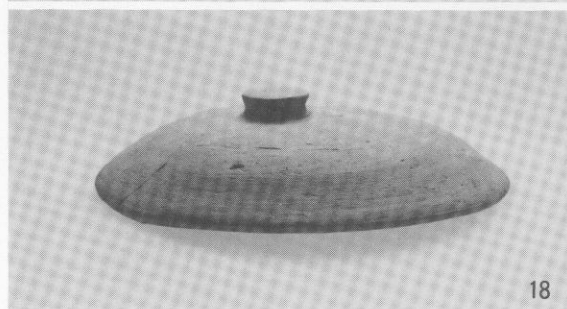
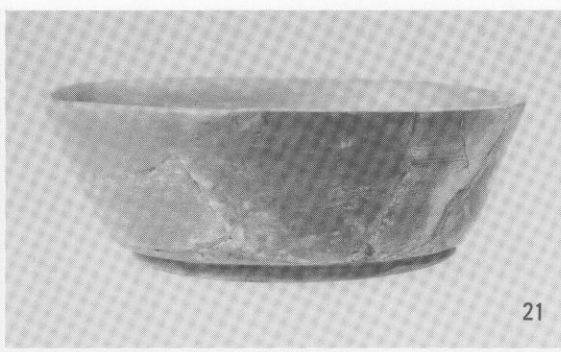


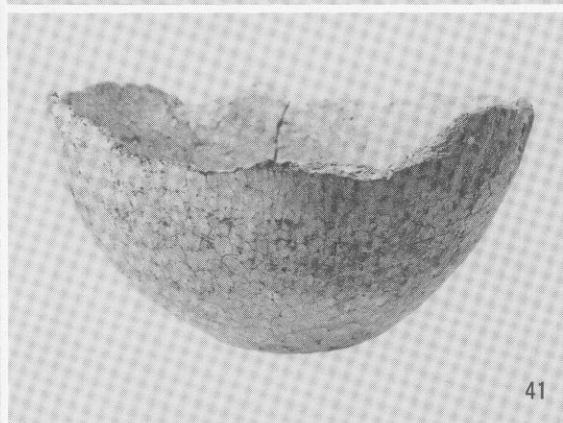
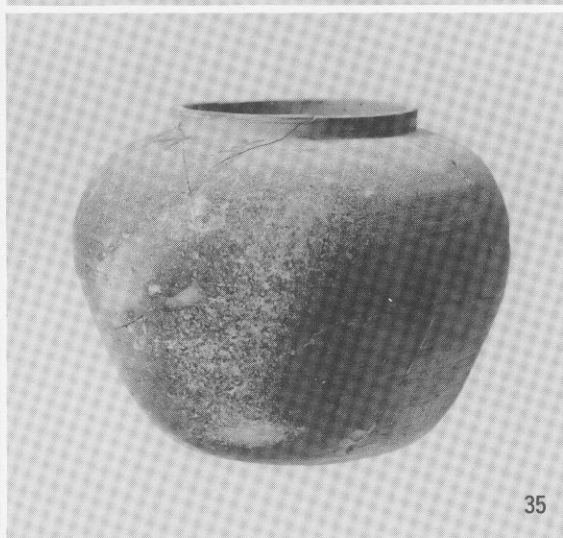
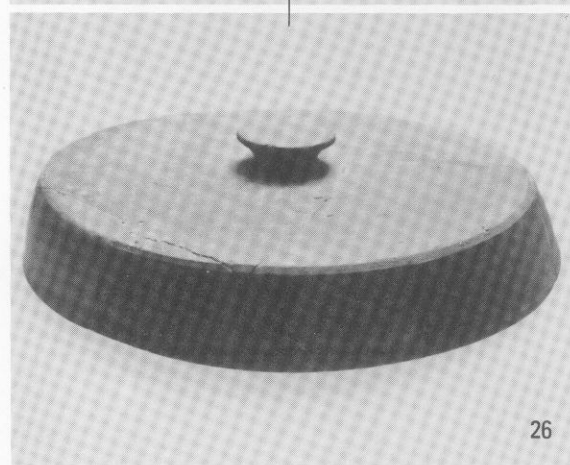
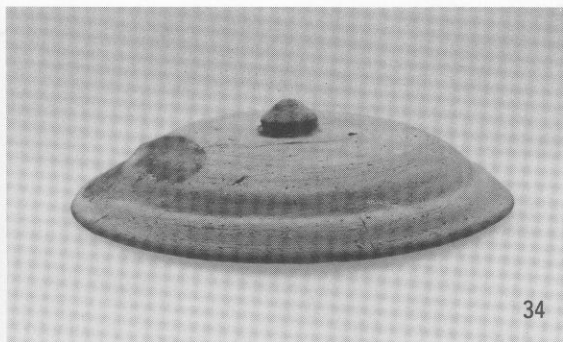
(1) 土坑-2

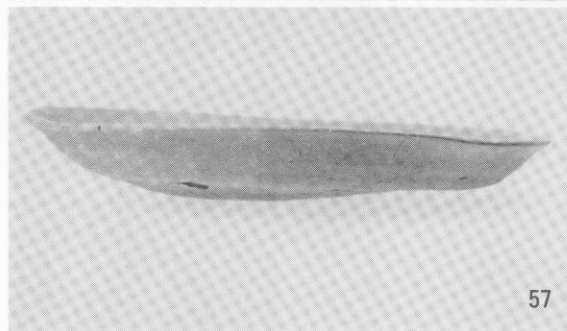
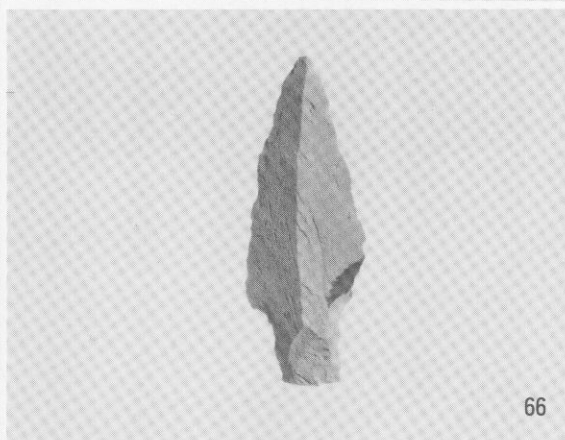
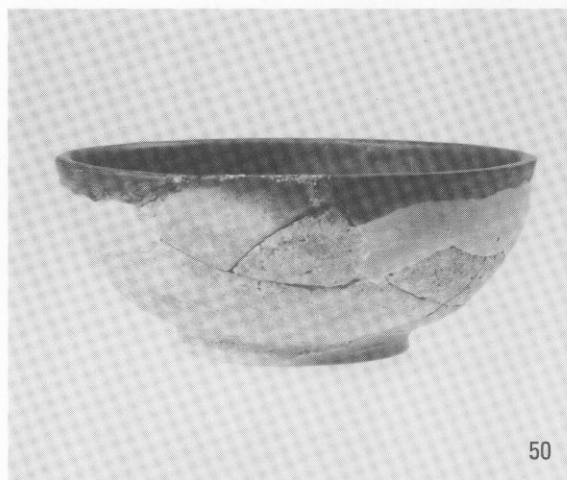


(2) 土坑-3·4









出 口 遺 跡

大野城市文化財調査報告書

第 28 集

平成元年 3 月 31 日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町 2 丁目 2 番 1 号

印刷 福岡市南区高宮 1 丁目 7 - 19
川辺印刷有限会社